ピカイチ先生の
生活経営セミナー

2016年04月
お金と折り合う
（① お金の形態を知る）

ネクストライフ・コンサルティング
〒975-0038
福島県南相馬市原町区日の出町167-3
info@next-life-consult.com
ピカイチ先生　検索

ピカイチ先生

中央銀行とビットコイン

いま、貨幣の世界では、二つのドラマが同時進行しています。

一つは百年以上も前から続く中央銀行という役者たちが繰り広げる金融政策という名の壮大なドマです。そして、もう一つはわずか数年前に大道芸のように始まったビットコインという名のエスプリの効いたドラマです。

この二つのドラマは、今のところは絡み合うことなく進行しているようにみえます。しかし、それはいつまでも続くものではないでしょう。二つは、やがて影響し合い絡み合いながら進行し始めるはずだからです。

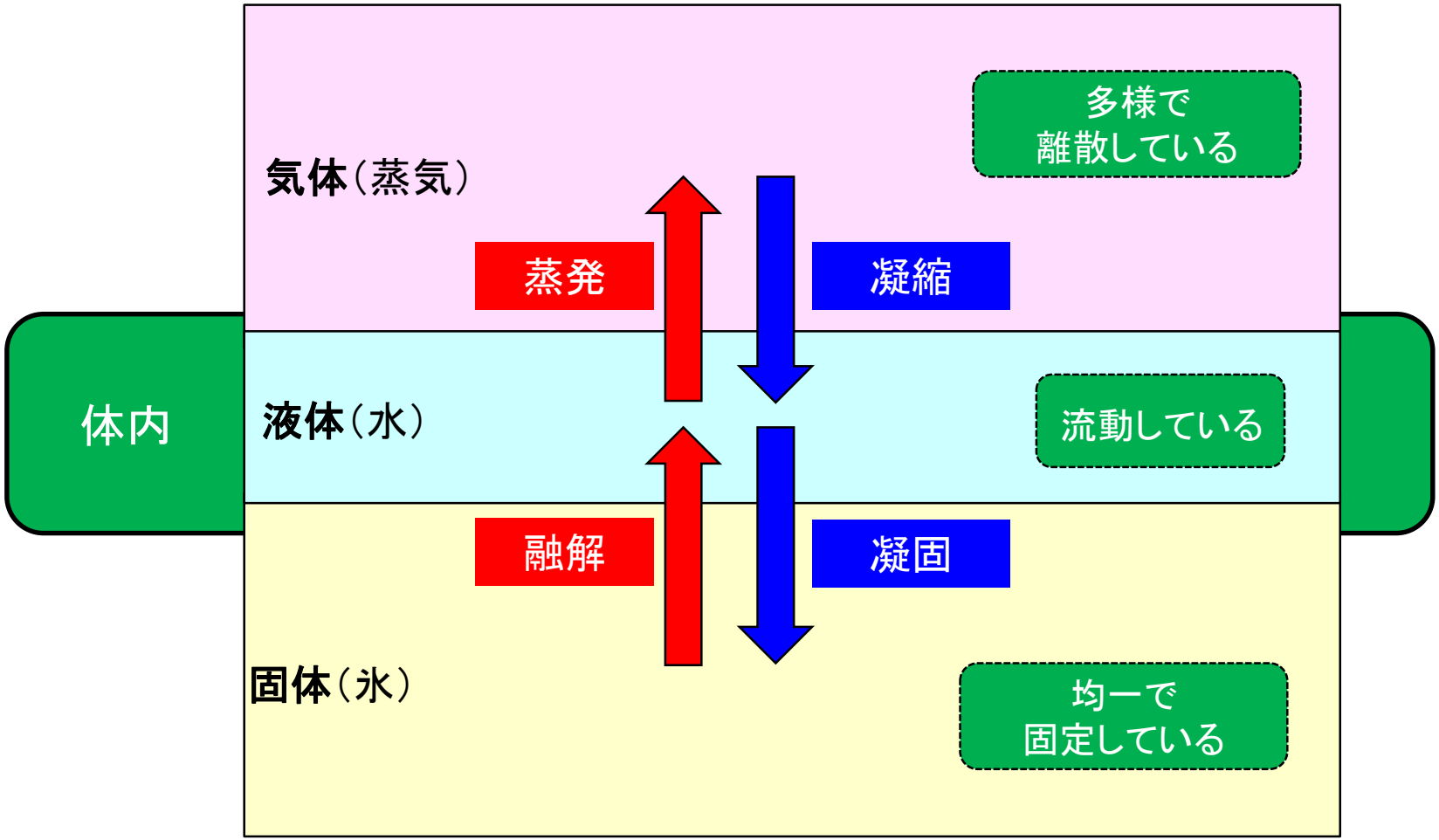
ビットコインはまだ小さな存在にすぎませんが、それでも、今、通貨の世界にビットコインという来訪者が現れたことの意味は大きいはずです。

それは、ビットコインが、中央銀行たちが提供する通貨つまり銀行券や、それをベースに作り出された電子マネーなどと呼ばれている決済手段とは異質の「価値の拠り所」を持つ貨幣だからです。

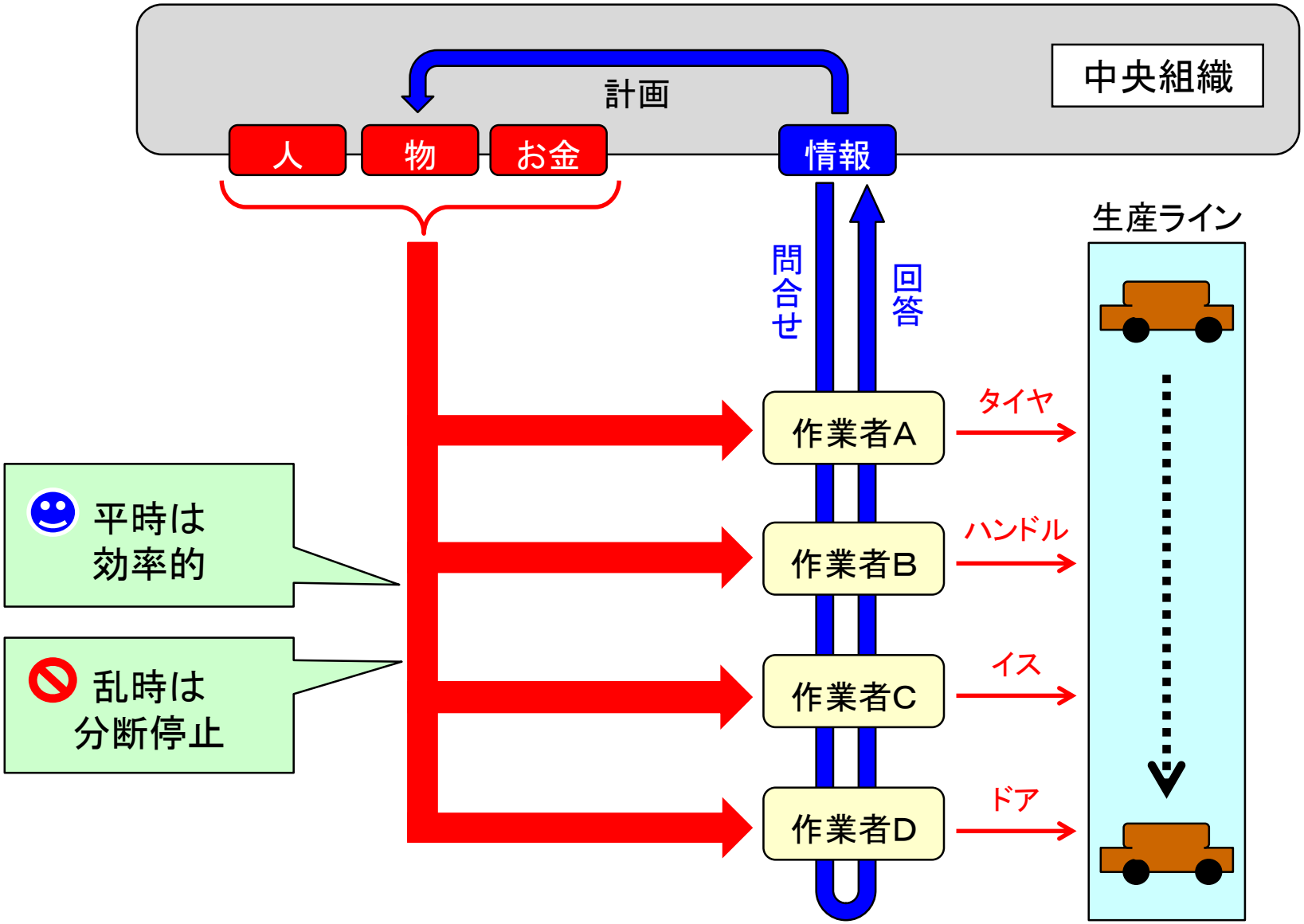
外からの来訪者は現在の自分を考えるのにいつも良いヒントを与えてくれますが、ビットコインもその例外ではないのです。

『中央銀行が終わる日』（岩村 充）より

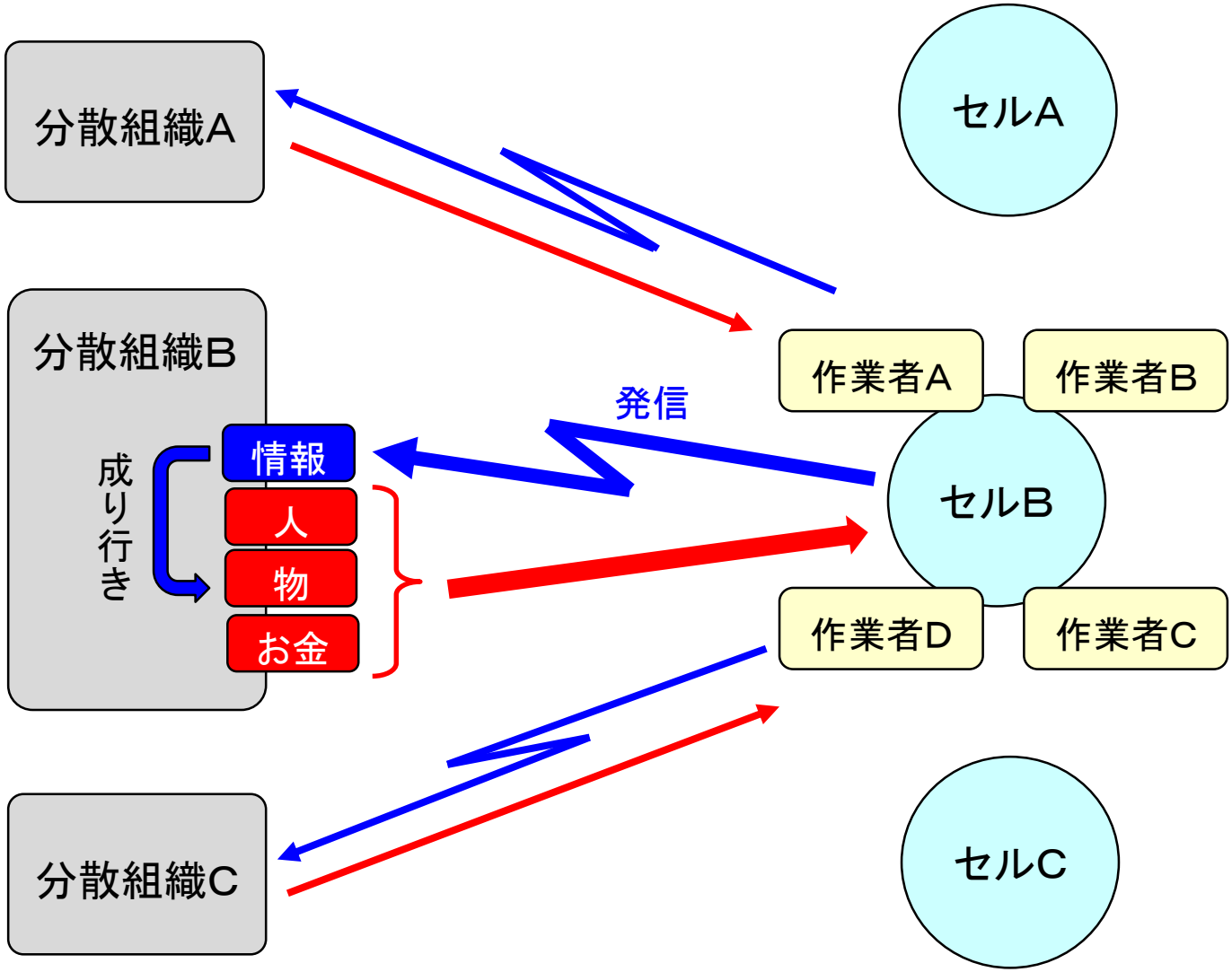
「水」の三態



集中生産システム（ライン方式）



分散生産システム（セル方式）



システムや制度の三態

	固体	液体	気体
システム構成	集中システム		分散システム
適合時代	平時		乱時
助け合い	公助		自助・共助
ジェンダー	男性性的 （政治的・制度的）		女性性的 （社会的・生活的）
エネルギー伝達	化石エネルギー （結合 ⇒ 交換）		波動エネルギー （共振 ⇒ 共有）

「日本文化」を生んだ背景

大陸では広大な地域に、互いに距離が遠い高地、平野、沿海地域が、それぞれ独立的に広がっている。この地形間の距離の大きさは、民族的な距離の大きさを生み出している。

それに対して日本列島のような地形では、大陸のように、高地と平地が民族的、文化的な対立をつくりだすだけの広大さはない。そのため日本列島では、対立よりは親和とか融合の軸を大きくとることが重要なのだ。このことは、日本列島では文化的な複合がきわめて起こりやすいことを意味している。

各地のさまざまな文化の複合体としての日本。徹底した対立にまで行くことがなく、いつしか融合と調和へと結果していく日本。農業、漁業、林業から各種の職業技術をともに発展させてきた日本。

こうした日本文化に見られる融合あるいは共生・共存的な特徴は、大陸や半島とは異なる、特異な地形のあり方に大きくかかわっているものと想像できる。

実際、日本列島では海と山に生活する人々のあいだで、互いの産物を通しての直接交渉が古くから行われてきた。

「縄文思想が世界を変える」（呉 善花）より

「日本文化」が求める前提

日本の庭園のあり方というのは、たとえば、回遊式庭園というのは木や岩などが私の背より低いところにあり、常にどこかの場所に立ったままで眺めるようになっています。

そこから眺めると、池があり、池の中に島があって、島との間には橋が架かっています。その奥に滝があって、滝の奥に茶室があるというように、日本庭園は見る者に奥行を感じさせる構造になっています。

橋の裏に何があるのだろうとか、その滝の隣には何があるのだろうと想像力をかきたてられます。私が最初に日本庭園を見たとき、頭が痛くなったのはそのせいかもしれません。（中略）

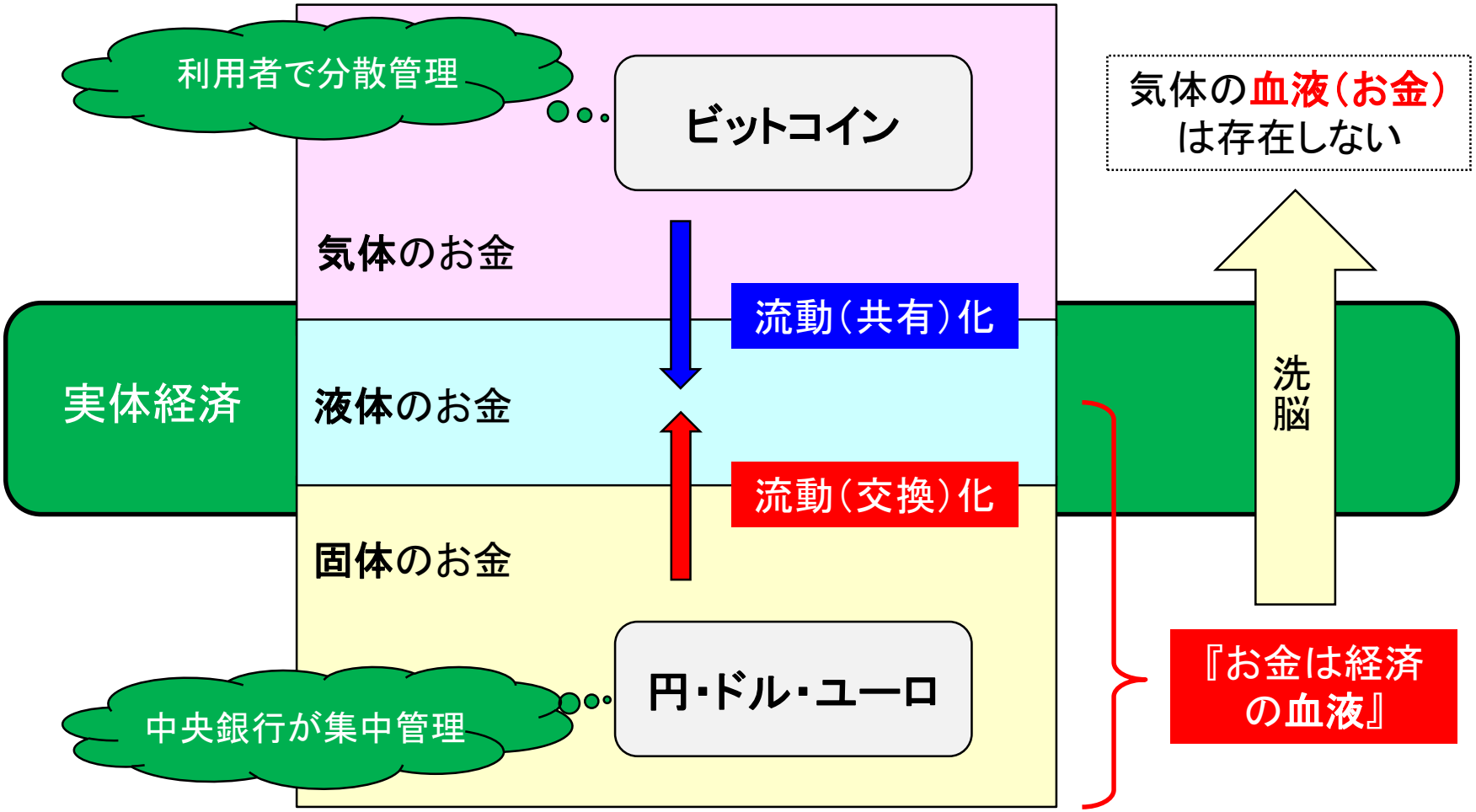
一方、西洋の庭園というのは、自然から離れ、自然と対立し、自然に対する人間の力を誇示しているものですから、そこでも頭を働かせる必要はありません。

ところが、日本の庭園となりますと、ここかしこに島があります。視神経を通じて受け取ったその島の情報を脳が判断しながら、なんと不思議なこの配置はいったい何なのかとか、島の裏に何があるのか、と考えさせられます。

そういうミステリアスな刺激で頭が複雑になって痛くなるというわけです。

「日本浪漫紀行」（呉 善花）より

お金の相転移


利用者で分散管理
ビットコイン
気体のお金
流動（共有）化
実体経済
液体のお金
流動（交換）化
固体のお金
円・ドル・ユーロ
中央銀行が集中管理
気体の血液（お金）は存在しない
洗脳
『お金は経済の血液』

中央銀行の終わりの始まり（1/2）

今回の資産価格上昇は様相がやや違うでしょう。

それは手に取ってデフレをインフレに逆転させるというメッセージを発し始めた中央銀行たち、彼らが握る国際通貨体制という名の貨幣の世界からの逃避の最初の一歩なのかもしれないからです。

今までの世界であれば、中央銀行のやることに不安を覚えた人が選択する行動は、もう一つありました。自分勝手に不安を海に乗り出し始めた中央銀行が提供する貨幣の船を降りて、他の中央銀行の船に乗り換えればよいのです。

要するに、円の将来に不安を覚えたらドルに、ドルにも不安を覚えたらマルクに、などと通貨を乗り換えればよかったのです。

変動相場制というのは、それを可能にする通貨システムです。つまりは、貨幣の世界にとどまりながら、他の貨幣へと逃げればよいのです。

（次頁へつづく）

『中央銀行が終わる日』（岩村 充）より

中央銀行の終わりの始まり（2/2）

ところが、この章の冒頭で示した協調の風景は、こうした選択肢を閉じてしまっていることを示す風景でもあります。

もちろん、かつての固定相場制が戻ってきたわけではありませんから、自国通貨から外貨に乗り換えるのは自由です。しかし、そうした通貨を提供している中央銀行首脳たちが仲良くカメラの前に並び、政策の歩調を揃えるのだと声高に宣言し始めたら、もはや通貨の乗り換えは意味を持ちません。

選択肢を事実上閉じてしまっている、しかも、異次元緩和とか量的緩和などという非伝統的金融政策を続けるという方向で、選択肢を閉じてしまっているのです。

そのとき不安を覚える人は何をするでしょう。

株や不動産あるいは貴金属も解決策の一つでしょうが、もっと貨幣に近いもの、しまっておくにも持ち運ぶにも便利なものを探す人も出てくるでしょう。

そうした不安の行き先になったのが、今までとは違う種類の貨幣、中央銀行たちが提供するのではない新しい貨幣だったように私は思っています。

『中央銀行が終わる日』（岩村 充）より